



Title	Etude sur le manuscrit inedit du Roman de Brut B. L. Cotton Vitellius, A. X. ff. 76b24-108d18 : Langue du manuscrit
Author(s)	高岡, 優喜
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/39102">https://hdl.handle.net/11094/39102</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	高岡 優喜
博士の専攻分野の名称	博士 (言語文化学)
学 位 記 番 号	第 11931 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 7 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学 位 論 文 名	Etude sur le manuscrit inédit du <i>Roman de Brut</i> B. L. Cotton Vitellius, A. X. ff. 76b24-108d18 —Langue du manuscrit— 『ブリュ物語』未刊行写本の言語研究 英國図書館所蔵 Cotton Vitellius, A. X. ff. 76b24-108d18)
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 大高 順雄
	(副査) 教 授 高岡 幸一 教 授 齊藤 俊雄

### 論 文 内 容 の 要 旨

当博士論文は、『ブリュ物語』*Le Roman de Brut* (1155) の未刊行写本を転写し、その言語を研究、そして電算機を用いた全単語のコンコルダンスを含む刊本の作成を主題としている。写本は英國図書館所蔵 Cotton Vitellius A. X. を選択し、研究範囲を ff.76b24-108d18 (計4696行) と限定した。これは『ブリュ物語』で最も有名なアーサー王物語の部分に相当する。『ブリュ物語』は完全写本20、断片写本7、計27の写本によって伝えられ、今回取り組んだ写本は13世紀末にアングロノルマン語で書かれたと推定されている。

写本は、子牛皮の裏表に35~37行の段で2段ずつ、ゴチック体で書かれている。テキストの校訂は最小限にとどめ、原本の尊重に努めた。写字生の明白なる誤写で無意味な綴り字以外はそのまま残し、注で問題点を明らかにした。音節数も過不足の修正は行わなかった。

論文では冒頭に写本の複写及び転写を挙げ、テキストに関する注を付加した。以下本文の研究対象項目である。

- I. 存在が確認されている全写本の概要
- II. 全刊本の総括
- III. 写本 Cotton Vitellius A. X. の概要及びその取り扱いについて。
- 略字記号の整理及び訂正箇所の明示を含む。
- IV. 言語研究：音韻、語形、統語法。
- V. 『ブリュ物語』におけるアーサー王物語の概要。アーサー王文学史における位置に言及。

巻末に本文の注及び参考文献を付加した。

別冊として作成したコンコルダンスの分類項目は以下の通りである。

- |          |          |          |          |          |          |
|----------|----------|----------|----------|----------|----------|
| I. 冠詞    | 1. 定冠詞   | 2. 不定冠詞  |          |          |          |
| II. 名詞   |          |          |          |          |          |
| III. 形容詞 | 1. 品質形容詞 | 2. 所有形容詞 | 3. 指示形容詞 | 4. 不定形容詞 | 5. 数形容詞  |
| IV. 動詞   | 1. AVOIR | 2. ETRE  | 3. その他   |          |          |
| V. 代名詞   | 1. 人称代名詞 | 2. 所有代名詞 | 3. 指示代名詞 | 4. 不定代名詞 | 5. 中性代名詞 |
|          | 6. 疑問代名詞 | 7. 関係代名詞 |          |          |          |
| VI. 副詞   |          |          |          |          |          |

VII. 小辞

VIII. 前置詞

IX. 接続詞

X. 間投詞

XI. 固有名詞 1. 人名 2. 地名

単語は語形、用法別に分類した。

言語の主な側面を総括すると、以下の様になる。

#### §. 略字記号

略字記号は、罫線外に縮小文字で書かれ、記号と同様に何等かの文字グループの代用とされる字母も含む。

略字記号はあくまで綴字に対して機能するため、その綴字の音節における位置は問題とせず (ex. Pler=p [ar] ler / Pole=p [ar] ole), 母音省略形の結合部分に用いられる (ex. q<sup>i</sup>l=q [u'i] l) こともある。

綴字の完全形が一様でない場合、記号が代用となる文字グループの解釈も不確定となる。略されていた文字は、テキスト中 [ ] で囲み、完全形とは区別した。

#### §. 韻 (平韻)

脚韻として認められる韻がほぼ全体を占めるが、以下の様な問題のある韻も確認されている。

1. 母音押韻 ex. merrat : avera, manance : place, tertre : senestre

2. 男女混合韻……男性韻と女性韻で構成する特殊な韻である。これは女性形の誤用や名詞の性への無関心、語尾の e の無視が主原因となっている。

ex. jugler : harpere, creü : rendue, meint : pleinte

3. アングロノルマン語法……通常 francien では構成されない韻が見出される

ex. envaierent : defendirent, reine : seisne (=saisine)

bon : tuen, vie : vurteiseie, aveir : defier

その他、誤写により、韻を踏むべき対句が欠落した句も見られた。2重母音のieはその語源に関わりなく互いに韻を踏み、特に口蓋化現象の結果生じたiが消失した語と残存した語で韻を構成する場合もある (ex. trebuché : neié, mestier : cher)。また、同一の語がiのある語形と消失した語形の双方を保有している (ex. chevaler / chevalier)。

#### §. 統語法

1. 格の混乱、特に主格形の衰退が顕著である。

A. 名詞 (固有名詞を含む)、形容詞、冠詞の語尾変化の誤用

a. 主格形と被制格形の混乱

固有名詞の一例	実際の格	語形
Walwains (cs)	20	2
Walwain (cr)	8	26

b. 不等音節語 ber 3 / baron (s) 44の主格形単数に、不必要的 s を付加した例 ex. 104d18 Forz fu li bers, li coups fu g [ra] nz

c. pere 9 / peres 4 主格形単数に不必要的 S を付加した例 :

ex. 103c 5 Ceo ke sis peres li conquist.

d. 女性名詞 soer 1 / soror (s) 3 の主格形の誤用

ex. 107a11 Sis niés, fiz sa soer, esteit,

e. 定冠詞男性単数被制格形の多用 :

79a22 Mes ore ad, ceo n [us] est vis,

ex. 79a23 Le demi mort les vifs occis.

B. 関係代名詞の主格形 (ki) に代わる対格形 (ke) の多用

ex. 107d 4 Cum la gent Art [ur] saveit,

5 Ke en guerre norie esteit

## 2. 名詞の性に関する混乱

### A. 人称代名詞 3人称の誤用

- ex. 77b 9 Le [con] te avez g [r] evé de guerre,  
10 E a exil metez sa terre  
11 E li cloez en cest chastel  
ex. 76c33 Tutes eures de lui pensout \*lui=王妃

### B. 名詞、形容詞、過去分詞の性数不一致

- ex. 102b30 La fu la meisné privee  
31 k' il out norri e allowee  
80d11 Ne si leid destructiun \*leid=laide

### C. 両性名詞

- ex. 82b22 Q [ua] nt Cador out fait cel occise,  
107d10 G [ra] nt fu le occise e pl [us] g [ra] nt fust  
105c32 Q [ua] nt il la g [ra] nt occise virent

3. *se* に代わる *si* の使用 ex. 77b 7 Mors sui, si tu ne me conseillez."

4. 所有形容詞強形の使用 (コンコルダンスより抜粋)

- ADJECTIFS POSSESSIFS (3 ms.s) A LA FORME TONIQUE :  
107a23 crestiene lei P [r] ist a soen lit femme le rei, Femme  
107a24 le rei, Femme son oncle e soen seignor P [r] ist a la gu  
77a31 Ulfín, un suen b (aron) privé, Ad p [r] i

### §. 語形

- 無音の *e* に対する無関心 ex. la fest/la feste, poesté/postee
- 特定の子音間 (f+r, v+r, d+r, t+r) に渡り母音の *e* が発生した語形と *e* のない語形の共存 ex. defendere/defendre fera/fra
- 子音の 2重化 ex. serra←être, reddirai←redire
- 所有者単数主格弱形 sis ex. 84a 2 Uncor esteit Walwein, sis filz,
- 直説法半過去 3人称単複数形の語尾 -out, -ouent 形  
ex. semblout, saetouent)
- er/re の音位転換が起きている。しかし同一の単語が音位転換を起こしている語形と起こしていない語形双方を有している。  
ex. charter/chartre (=prison)

以上は一部であるが、このような語法が確認されている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、未刊行写本 (British Library, Cotton Vitellius A. X., ff. 76b24-108d18, 総詩行 4696行) の文献学的研究である。当該部分における内容は、12世紀フランスの年代記・物語作家 Robert Wace の *Le Roman de Brut* (『ブリュ物語』) における、アーサー王物語部分である。

本論文は2部からなり、第1部は翻字および言語研究、第2部は品詞別 concordance である。

第1部に関しては、次の諸点が解明されている。

解読された上記写本は、現存する完全写本20、断片写本7のうち、特にノルマンディー語 (ないしアングロノルマン語) の特徴 (渡り母音の *e*、韻における性の混用、2格体系の混乱等) を顕著に含む貴重な写本である。翻字に際しては、写本の読みに忠実に従い、独断を加えなかった。写本転写における独断の排除は、今日における文献学上の

一方で、写本の全てを同価値とする見解を裏書する。これも本論の特質である。転写における略字記号は、厳密に字母に対応させ、刊行者の解釈であることを明示した。

韻の分析 (ai : e, ai : ei, e : ei, ei : oi, 母音化した 1 と側舌音の 1 の共存, 2 重母音の単母音化等) によって、当該本文を12世紀後半から13世紀前半に位置させた。なお、韻の性質は平韻を主体とし、母音押韻 assonance (a : at, ace : ance, erte:estre 等) は僅少である。次に、書法の解析によっても、韻の分析 (a=e, ai=e, ei=e, ie=i, ie=i, ie=i, u=u, 等) と同じ結果を得た。

統語法の点では、名詞、冠詞、形容詞の 2 格体系の混乱が顕著であり、名詞の性に関しては、両性名詞 (son navie / sa navie, un plaignes / une plaigne 等) や、同一名詞の語尾に無音の e の有無 (fest : feste, meisné : meisnee 等) が特徴的であることを指摘した。

第 1 部の末尾に、研究文献のリストが加えられ、この分野の研究成果が示されている。

第 2 部に関しては、次の構成が見られる。

分類は、冠詞、名詞、動詞、代名詞、副詞、前置詞、接続詞、間投詞、固有名詞の順である。各語は必用最小限のコンテクストと共に採取されている。

上記のように、本論文は未刊行写本を初めて世に出すと共に、言語の特質を示した点で、学術的成果は大である。

もっとも、批判を加えるとすれば、他の未刊行写本との校合が残されている。それによって初めて、本写本の言語の相対的特質が完全に明らかにされるであろう。

また、品詞別 concordance については、lemmatisation (見出し語設定) が残されている。これによってようやく concordance の存在価値が増加するであろう。

しかしながら、結論的に言えば、本論文は未刊行写本の研究として、この分野の研究に新たな光を投じ、後学に貢献するところ大であり、学位請求論文として、充分に価値のあるものであることを認定する。